

『ペスト』

フランスの小説家であり劇作家、哲学者でもあるアルベール・カミュ（1913年11月7日～1960年1月4日）の名作。第二次世界大戦終結直後の1947年に書かれた小説であるが、新型コロナウイルスのパンデミックに翻弄されている現在の世界を予言しているような内容である。

初めて読んだのは、中学2年生の時。随分昔のことになるが、同時期に読み漁った他の名作群とは全く異なる奇妙な読後感は記憶に残っている。二度目に読んだのは、2011年3月の東日本大震災に引き続く東京電力福島第一原子力発電所の事故後のあの重苦しい日々である。ペストに襲われたアルジェリアの港町オランの人々と放射能に怯える日本の人々を重ねて考えることで、精神の安定が図れると思ったのが読んだ理由である。あの事故から9年（放射性物質の半減期からすれば、“たったの”をつけるのがふさわしい）が経ち、そして今回、三度目の『ペスト』読書を始めた。

『ペスト』に次のような記述がある（以下、新潮文庫 宮崎嶺雄訳による）。「わが市民諸君は大いに仕事をするが、それは常に金持ちになるためである」。この文章は、新型コロナウイルスのパンデミックが巨額の予算をつぎ込んだオリンピック開催にどう影響するかが大ニュースになっている日本の現状を言いあてていないだろうか？また同書には、「投機がその間に介入して来て、通常の市場には欠乏している第一級の必需品などがまるで作り話みたいな値段で売られていた」という表現もあり、マスクが売り切れてしまい、ネット上でべらぼうな値段で売り買いされている現在の状況を連想させる。

終盤、ペストと闘った医師リウーは、「ペストと生の賭けにおいて、およそ人間が勝ちうることでできたものは、それは知識と記憶であった」と述べる。今回の新型コロナウイルス騒ぎも早晩収まるだろうが、どのようなことが起こったのかを正確に記録し、記憶すること、そしてその知識を次の世代に渡すことがわれわれの責務であろう。

多くのイベントが中止となり、娯楽施設も閉鎖された今、「ペスト」を読んでみませんか？